

「竹葉舟」考

一

元雜劇の原像を考える上で、缺くことのできない資料に『元刊雜劇三十種』がある。^①このテキストの特徴については、既に金文京氏が『元刊雜劇三十種』序説、「いわゆる一人獨唱からみた元雜劇の特色」という論文において、詳しく論じられている。^②その言葉を借りて言えば、このテキストは「元統・至元頃に最初の版木が作られ、それがその後、この三四十年の間に部分的に幾度か覆刻、補刻されたものによせあつめ」であるという。本稿では、元刊三十種の一つ「陳季卿悟道竹葉舟」という作品に注目し、元來本劇がどのような性格のテキストであったのかを考察したい。まず、この作品の内容を紹介しておこう。

江南の擧子陳季卿は科擧に落第して、都の青龍寺に居候する。そこに、呂洞賓が彼を度脱しようとやってくるが、呂の誘いをよそに、陳は壁の地圖を見て、歸郷の念を口にする。これを見た呂は竹葉を壁に貼り、彼を家まで送ることを約束する。陳は小舟になった竹葉に乗り、故郷に向かう（第一折）。歸路を急ぐ陳季卿

陳 文 輝

は、途中で道に迷い、列子・張良・張騫・葉靖の四仙人と出會う。四人は呂洞賓と同様に出家することを勧めるが、陳は悟らず、歸る道を教えてもらい、四仙人と別れる（第二折）。漁夫になりすました呂は、陳を家まで送る。家族と團欒を果たした陳は、迫ってきた科擧のため、再び呂の舟で都に戻る途につくが、強風におおられ、舟が轉覆して河に落ちる。驚いて目が覺めた彼はこれまでのことが全て夢であったことに氣づく。呂が残した詩を見て、仙人に出會ったことを悟り、あわてて呂の後を追う（第三折）。陳季卿は呂洞賓を追いかけ、悟ったことを訴え、出家することを決心する。そこで、呂洞賓は彼に八仙を紹介して彼を度脱する（第四折）。

本雜劇は曹本・天一閣本『錄鬼簿』と『太和正音譜』に著録され、『元刊雜劇三十種』（以下元刊本と略稱）と明・臧晉叔の『元曲選』にテキストが収録されている。元刊本は題目を「呂純陽顯化滄浪夢」、正名を「陳季卿悟道竹葉舟」とし、天一閣本は「呂純陽」を「呂洞賓」とする。『元曲選』本では題目を「呂洞賓顯化滄浪夢」、正名を「陳季

「竹葉舟」としては、『元明北雜劇總目考』に「竹葉舟」としては、『太平廣記』卷七四に見え
 康という人物であるが、彼については、曹本『錄鬼簿』「方今已亡名
 公才人余相知者」の條に「字は子安（或は子英という）、杭州の人。
 性理に明るく、講解を善くし、詞章を能くし、音律に通ず。王伯成に
 『李太白貶夜郎』有るに因りて、乃ち『杜甫游春』を編す。一たび筆
 を下せば即ち新奇なり、蓋し天資は卓異にして、人は及ぶべからざる
 なり」といふ。鍾繼先が彼を弔した『凌波仙曲』には、「占文場第一
 功、掃千軍筆陣元戎」と詠われ、そのすぐれた才能が稱えられている。
 さらに、『太和正音譜』「古今群英樂府格勢・元一百八十七人」の部に
 は「范子安の詞、竹裏の鳴泉の如し」とある。

「竹葉舟」に關しては、『古典戲曲存目彙考』と『元明北雜劇總目考
 略』にすでに考察がなされる。本事の考證に重心を置く『古典戲曲存
 目彙考』は、本事の内容を簡單に示し、「（『竹葉舟』の）本事は唐・
 薛昭蘊『幻影集』にあり、また『纂異記』及び『異聞實錄』にも見え
 る」といふ。さらに該書は、元・羅燁『醉翁談錄』に見える話本「竹
 葉舟」とはすなわち『晁氏寶文堂書目』「卷中・子雜」に著録される
 『陳季卿悟道竹葉舟傳』であろうことを指摘する。實際に『醉翁談錄』
 卷一甲集（舌耕紋引・小説開闢）の部分で徴するに、「種叟神記」、
 『月井文』、『金光洞』、『竹葉舟』、『黃梁夢』、『粉合兒』、『馬諫議』、
 『許岩』、『四仙鬪聖』、『謝澹落梅』を論ずれば、此れ神仙の套數なり
 とある。「竹葉舟」とともに擧げられた「種叟新記」などは恐らく當
 時あった話本の題目であろう。『晁氏寶文堂書目』に著録される『陳
 季卿悟道竹葉舟傳』が、『醉翁談錄』に見える話本「竹葉舟」と同じ
 ものであるかどうかについては、もちろん何の確證もない。

これに對して雜劇の「考釋」を行った『元明北雜劇總目考略』では、

「竹葉舟」考

本事として唐・薛昭蘊『幻影集』のほか、『太平廣記』卷七四に見え
 る「陳季卿」の話擧げ、「竹葉舟」の元刊本と『元曲選』本の簡單
 な比較も行っている。その言葉を引用すれば、『元曲選』本と元刊本
 とは曲辭において大きく異なる。特に第四折の「贈曲」（これは恐ら
 く「増曲」の誤植であろう。引用者注）に關して、元刊本では呂洞賓
 が獨唱する一套の「道情曲」からなるが、『元曲選』本では列子・張
 良・葛洪の三仙人が合唱する形をとり、曲辭も完全に異なる」といふ。
 「竹葉舟」のテキストは、元刊本・『元曲選』ともに、實は多くの問
 題を抱えている。具體的な論證を行う前に、「竹葉舟」を収める元刊本
 と『元曲選』の諸要素をここで一覽表にまとめて示しておく。

元刊本				『元曲選』			
第三折	第二折	第一折		第三折	第二折	第一折	
扮夫 呂が改 た漁	呂洞賓	呂洞賓	歌唱者	扮夫 呂が改 た漁	呂洞賓	呂洞賓	歌唱者
尤侯韻	尤侯韻	魚模韻	押韻	尤侯韻	尤侯韻	魚模韻	押韻
南呂宮	雙調	仙呂宮	宮調	南呂宮	雙調	仙呂宮	宮調
【點絳脣】混江龍】油 胡蘆】天下樂】那吒 令】鵲踏枝】寄生草】 【公篇】醉中天】金盞 兒】尾】	【新水令】駐馬聽】雁 兒落】掛玉勾】（高） （沽）美酒】滴溜金】 【折桂令】川撥棹】七 弟兄】梅花酒】收江 南】離亭宴煞】	【點絳脣】混江龍】油 胡蘆】天下樂】那吒 令】鵲踏枝】寄生草】 【公篇】醉中天】金盞 兒】尾】	【點絳脣】混江龍】油 胡蘆】天下樂】那吒 令】鵲踏枝】寄生草】 【公篇】醉中天】金盞 兒】尾】	【點絳脣】混江龍】油 胡蘆】天下樂】那吒 令】鵲踏枝】寄生草】 【公篇】醉中天】金盞 兒】尾】	【點絳脣】混江龍】油 胡蘆】天下樂】那吒 令】鵲踏枝】寄生草】 【公篇】醉中天】金盞 兒】尾】	【點絳脣】混江龍】油 胡蘆】天下樂】那吒 令】鵲踏枝】寄生草】 【公篇】醉中天】金盞 兒】尾】	【點絳脣】混江龍】油 胡蘆】天下樂】那吒 令】鵲踏枝】寄生草】 【公篇】醉中天】金盞 兒】尾】

【上馬嬌】 你道是妻子嬌。家業縛。幾般兒勝似斬人刀。我這裡微微觀罷呷呷笑。暢好是喬。空著人波波碌碌枉徒勞。

【勝葫蘆】 一任教天宮饒不饒。懶去束帶立於朝。我只待明月清風爲故交。鳥飛兔走、水流花落。嘆塵世不堅牢。(卷四B)

【節節高】 俺這裏洞天深處、端的是世人不到。我子待埋名隱姓、無榮無辱無煩無惱。你看那蝸角名、蠅頭利、多多少少。我子待夜睡到明、明睡到夜、夜睡到曉。呀、不覺的刮馬似光陰過了。

【元和令】 我喫的是盤蔬飲一瓢。穿的那布道服是一套。則待粗衣淡飯且淹消。任天公饒不饒。我子待竹籬茅舍枕著山腰。掩柴扉靜悄悄。嘆人生空擾擾。

【上馬嬌】 你子待家道興、名分高。兩件兒受煎熬。幾時得舒心樂意寬懷抱。常子是焦。煩惱蹙兩眉梢。

【勝葫蘆】 你子待日夜思量計萬條。怎如我無事樂陶陶。俺這裏春夏秋冬不凋。倚窗寄傲。杖筇凝眺。看鸚鵡摘金桃。(卷五C)

まず、ここで説明しておかなければならないのは、(C)の【節節高】という曲牌は、【村裏迓鼓】の異名に他ならないことである。次に、『雍熙樂府』の「半生修道」で始まる(B)の四曲は套数の冒頭に置かれ、「俺這裏洞天深處」で始まる(C)の四曲は套数の中間に置かれていることに注意しなければならない。比較して分かるように、『元曲選』本の四曲(A)は内容的には『雍熙樂府』巻五の(C)に似るが、套式の面、つまり套数の中間ではなく冒頭に【村裏迓鼓】(即ち【節節高])が置かれるという点においては、巻四の(B)と一致する。

また、『雍熙樂府』に見えるこの二つの套数は、どちらも仙呂宮に属している。元雜劇において、「仙呂宮」は、普通は楔子と第一折に使われる。「竹葉舟」第四折前半の曲が「仙呂宮」であるならば、楔子或いは獨立した一折である可能性を考えなければならぬ。

雜劇の「楔子」は内容上高度に壓縮された物語の展開を説明する部分であり、構造上作品の冒頭、また折と折の間に置かれることが多い。そして必ず二曲を超えない短いものである。對する「竹葉舟」の「仙呂宮」は、折の冒頭に置かれ、しかも『元曲選』では四曲、元刊本の場合には八曲もある。「楔子」と見なすのは明らかに妥當ではない。

『元刊雜劇三十種』に收められた雜劇の中には、「竹葉舟」のように最後の一折に二つの宮調が使われるものがある。「紫雲亭」(雙調+大石調)、「東窗事犯」(正宮+仙呂宮)、「眨夜郎」(雙調+仙呂宮)の三作品である。しかも「紫雲亭」以外は、第二の宮調はいずれも「仙呂宮」となっている。だが、これらを「竹葉舟」第四折の「仙呂宮」と同列に扱うことはできない。これら仙呂の數曲は、作品の最後におかれ、戯曲全體の内容をまとめるという特徴を共通してもっている(「紫雲亭」の第二の宮調の場合も同様である)。物語に關わる正文というより、芝居が終わってからの「散場」の一部だと考えるのが恐らく妥當なのである。さらに、「散場」や「楔子」として使われる場合には、必ず決められた「曲牌」を用いる。「散場」の場合には【後庭花】【柳葉兒】の二曲が使われ、「楔子」の場合には必ず【賞花時】及びその【幺篇】が使われる。「竹葉舟」の「仙呂宮」數曲と「東窗事犯」等のそれとは、本質的に異なるのである。つまり、「竹葉舟」の諸曲は、「散場」でもなければ「楔子」でもない。

では、この套数は獨立した一折として認定できるだろうか。もし、

獨立した一折であれば、構造上「竹葉舟」は五折からなることになる。『元刊雜劇三十種』に収録される「趙氏孤兒」という作品もまた、『元曲選』本では五つの宮調を用い、五折構成となっている。この例をふまえると、その可能性がないわけではない。だが、『元曲選』は「竹葉舟」のこの套數を獨立した一折にもしなければ、完全に削除もしなかつた。あえて縮小して二つの宮調を温存する、という中途半端とも見える處理を行ったのである。恐らく、『元曲選』本が基づいた原テキストにその部分があり、その意味を測りかねて中途半端な處理になった、ということだろう。より單刀直入に言えば、『元曲選』本が基づいた原テキストは、元刊本「竹葉舟」と同じ體裁を持ったものだったのである。『元曲選』本の編者は、元刊本のその部分に八曲の套數がなぜ置かれているのか理解できなかった。かといって、削除してしまふこともできず、『雍熙樂府』などを参照して情節の一致する套數を選び、その規模を縮小して差し替えたのではあるまいか。

だが、そうだとすると『元曲選』本は元刊本に基づき、もとにあった曲を差し替えただけだということになり、第四折に正宮と仙呂宮の二つの套數があるという不體裁の原因は謎のまま残される。そもそも、元刊本「竹葉舟」は、なぜ第四折に二つの套數を置くことになったのだろうか。

二

前掲の一覽表からも明らかのように、「竹葉舟」元刊本と『元曲選』本とは、もう一つ重要な問題点を共有する。それは第二折と第三折の韻目の問題である。元雜劇の四つの套數は韻目を異にするのが通例であるが、「竹葉舟」の第二・三折は、元刊本・『元曲選』本ともに尤候

韻を用いる。このことは恐らく、『元曲選』本は元刊本に基づくこと、その元刊本も必ずしも原作本ではないこと、この二つを意味するだろう。つまり、原作にはなかつた套數を挿入したために、同じ韻目の套數が二つ並ぶという不體裁が生まれてしまったのである。では、第二折と第三折とは、一體どちらが後から挿入された套數なのだろうか。そのことを劇情その他から推測してみよう。

冒頭に示した作品の梗概にあるように、第二折は歸郷途中の主人公陳季卿が呂洞賓及び列子・張良・張騫・葉靖の四仙人と出會い、出家を勧められるも斷る、という内容である。その一部を次に示す。

「正末引淨孤四人戴逍遙巾道裝上、二云」神仙每好快活。

【新水令】我曾向五湖三島自遨遊。則我這拂天風兩枚袍袖。喚靈童采瑞草、同仙子上瀛洲。散誕優游。嘆塵世幾昏晝。

【駐馬聽】我故國神遊。見物換星移幾春秋。將浮生講究。經了些夕陽西下水東流。嘆興亡眉鎖廟堂愁。爲功名人似黃花瘦。歸去休。看銀山鐵壁層層秀。

（正末が淨・孤の四人を引き連れ、逍遙頭巾をかぶり、登場していう）仙人であるのは、なんと楽しいことよ。

私はかつて自ら五湖三島に漫步した。天風に搖れなびく長衣の兩袖。靈童を呼び瑞草を採らせ、仙女とともに瀛州に赴く。心の赴くまま悠々自適。歎わしいことに俗世間は日に日に移り變わっていく。かの國に心遊ばせ。幾春秋かが過ぎ物事の變わるのを目にする。浮き世を論ずるに。西に沈む夕陽と東に流れ逝く水を幾たび目にしたことか。興亡を歎いては眉をひそめ朝廷のことを憂え悩む。功名がため秋風に枯れる菊花のように憔悴する。俗世

間を離れてしまえばすべての憂いが消え去る。見よ、美しい銀色の山、鐵の錆色の岩壁の相變わらぬこと。

これは折の冒頭で呂洞賓が列子等四人と登場する時のうたである。さらに、歸路を急ぐ陳季卿が登場した後、呂が彼を相手に歌った内容も見てみよう。

【川撥棹】枉了你自傷愁。緊閉談天說地口。便滅楚興劉、拜相封侯、佐漢祖功施宇宙、眞乃是補天完地手。

【七弟兄】剗地點頭。拂袖。五雲遊。棄司徒金印沉如斗。玉溪邊煙水不停流。看翠岩前風月長依舊。

一人のいらぬ心配。天や地を論ずることを口にするでない。かの楚霸王を滅ぼして劉高祖を興し、宰相に拜され、侯爵に封ぜられ、漢高祖劉邦を補佐した功績は宇宙ほど大きい、まさに天地を救うほどの人物（張良）でも。ふと悟りを開き。俗世間を離れ。五色の雲に乗り心遊ばせ。斗ほどもある司徒の金印など投げ捨てて。仙界では玉溪のほとりに靄が流れめぐる。見よ、翠岩の前に變わらぬ風月。

前の【新水令】【駐馬聽】二曲は不老不死の仙人の悠々自適の生活を自慢する内容であり、後の【川撥棹】【七弟兄】二曲は、「滅楚興劉、拜相封侯、佐漢祖功施宇宙」という曲辭からすれば、張良（子房）が榮華富貴を捨て出家したことを以て、陳季卿を悟らせようとしたものである。つまり、これらは浮世における名利の虚無を説く、所謂「道情曲」なのである。この第二折は、全體を通してこのような曲辭

のみで構成されている。

續いて第三折では、呂洞賓が漁夫になりすまし、歸郷途中の陳季卿を船で運ぶ、という情節が展開される。そこではまず、漁夫の水上生活が優雅に詠われる。

「正末扮漁夫披蓑衣搖船上、開」……俺這打魚人好是快活。

【梁州第七】管甚麼送青春夕陽西下、任無情江水東流。輕煙細雨迷了前後。垂楊曲岸、芳草汀州。蓑衣披體、箬笠遮頭。這的是打魚人一段風流。相伴著野鷺沙鷗。恰離了陶朱公一派平湖、過了那蜀諸葛三江渡口。兀良早來到漢嚴陵七里灘頭。我三個恰好滄波老樹爲知友。食楚江萍勝似粟肉。受用的是新釣的鱸魚旋斝的酒。樂以忘憂。

（正末が漁夫に扮して蓑をはおり、船を漕いで登場していう）
……われら漁夫はなんと楽しいことよ。

春が過ぎ去って黄昏になることを氣にかけぬ、無情な江水が東に流れるに任す。輕き靄と霧雨が周りに立ちこめる。枝だれ柳に曲がりくねった岸邊、芳しい花が香る中洲。蓑をはおり、笠をかぶる。これぞ我ら漁夫の風流というもの。鷺とかもめとを伴い。陶朱公が歸隱した平湖を去って、蜀の諸葛孔明が戦った三江の渡し場を過ぎたかと思えば。はやくも漢の嚴陵が釣りをした七里灘に辿り着く。蒼い浪、古き樹木、我ら三人はまさに親しき友。楚江の萍を食べば黍や肉にも勝るほどの旨さ。楽しみは釣ったばかりの鱸に醸したてのお酒。楽しみを盡くして憂いを忘れ去る。

そして、呂洞賓が漁夫に姿を變えて待ちかまえているところに陳季

卿が登場すると、次のようなたが展開される。

「等外末云了」「正末做聽的科」

【隔尾】莫是燃犀溫嶠江心裏走。莫是鼓瑟湘靈水面上游。我與你凝望眼菰蒲邊耐心兒候。這裏是沙堤岸口。又不是家前院後。這喚渡船行人在那答兒有。「等外末見漁翁喚渡唱」「正末云」秀才、你那裏去。「外末云」你問我做甚麼。

【賀新郎】你待渡關河、我須索問根由。你是做買賣經商、是探故人親舊。你在滄波側畔呆答孩候。「外末云了」你莫不是楚三閭懷沙自投。莫不是伍子胥雪父冤仇。莫不是學李謫仙捫月去、莫不是學范蠡欲歸舟。「等外末云了」二元來趕科場不及第村學究。本待執御苑春風白象簡、不及第待趁煙波明月釣魚舟。

(外末の陳がセリフをいう) (正末の呂が耳を傾けるしぐさ)

おやおや、かの犀の角に火を點した溫嶠が江を渡っているのか。それともかの瑟を弾いた湘靈が遊んでいるのか。眼を凝らしわびしい渡し場でわしはじっと我慢しておまえを待っているぞ。ここは砂地の渡し場。立派なお屋敷ではないぞ。渡し船を探す旅人はどこにおるのやら。(外末が漁夫と會い、船を呼ぶ) (正末がいう) 秀才や、どちらに行く。(外末がいう) 小生に聞いてどうするのでしょうか。君が河を渡りたいというから、わしはひとまずわけを聞くのだ。君は商賣しにいく商人なのか。それとも親族友人を訪ねるのか。蒼浪の畔にぼんやりと立ちつくす。(外末がいう) 君は楚の屈原のように身投げをしにきたのか。伍子胥に倣い父の仇討ちに行くのか。李白がお月さまを掬うのをまねるのか、それとも范蠡を學んで隱居に來たのか。(外末がいう) なるほど

科擧に落第した貧乏秀才だと。春風がめぐる御苑で象牙の笏を手にするはずだったのに、落第してこの霞や明月に満ちる川邊でわしの釣り船に乗ることとなったのか。

このように、からかわれながらも無事に家に着いた陳季卿だったが、歸京するときも呂が扮する漁夫の舟に乗り、そして河の眞ん中で遭難することになる。彼を遭難に追い込んだ荒波は、曲辭の中で次のように描寫される。

【三煞】趁著那啞啞數聲櫓響離了江口。見明滴流一點寒燈古渡頭。則見春江雪浪拍天流。更月黑雲愁。東瀨風狂雨驟。這天氣甚時候。白莽莽銀濤不斷流。那裡也楚尾吳頭。

【二煞】子見盤旋深處蛟龍吼。皓月當空鬼魅愁。番江攪海震動陽侯。諛的我怯怯喬喬、正著天陰船漏。執短棹有誰救。險些箇踏翻一葉舟。性命似水上浮漚。

【黃鍾尾】枉了你告玄冥禮河伯。頻叉手。你且定神思安魂靈緊閉眸。浪淘淘水逆流。沖三山蕩九州。憾天關、動地軸。滾金鰲、海上流。戰欽欽、冷汗流。魂離體、命欲休。死臨侵不能夠葬故鄉三尺荒丘。誰奠一盞北邱墳上酒。

ギイギイと櫓を漕いで岸辺を離れ。寒々とした燈火がぼつんと渡頭にきらめく。見れば雪のごとき白波が寄せては返す。更に雲も憂うるほどの闇夜。ビュービューザーザーと風も雨も激しく。こんな天気はみたことがない。眞っ白の浪は絶えず。楚やら呉やらはどちらの方向だ。ただ見るに、渦巻く深きところに蛟龍が吼る。白い月が空にかかれば鬼怪も懼れる。河や海をひっくり

返すほどの浪は波の神様をも震わせる。このわしもブルブルガタガタ、ましてや暗夜に船に水が漏れ。短き櫂を手にしていても救ってくれる人はあるまい。あわや小舟はひっくり返りそう。命は水の沫の如し。むだに水や河の神様頼み。頻りにお辭儀。心を定めて魂を安んじしっかり眼を瞑る。浪はあふれて逆流する。かの三山を押し流し九州を一掃するほどの威勢。天の入り口、地の軸を揺り動かす。海中の金色の巨鯨も流される。ブルブルと冷や汗を流す。魂は抜けて命は危うい。確と今回は故郷の荒れた三尺丘に葬ることができぬ。誰が墓場にて祭ってくれることやら。

「竹葉舟」の第三折に見えるこの漁父の水上生活と荒波の描寫は、作品中の最も優れた部分であると、『元明北雜劇總目考略』も言う。曲辭にちりばめられた様々な物語を暗示する典故、落第した陳季卿を揶揄する笑いを誘うかのような漁夫の言葉、口語を模した擬聲語・擬態語の連用、荒れる白波をつぶさに描寫する筆力、それらは全て元雜劇の精華というにふさわしい。まさに「占文場第一功、掃千軍筆陣元戎」と詠われた作者范康の作風であろう。

以上、「竹葉舟」の第二折と第三折の劇情を紹介した。引用した曲から見て、文學作品としての第二折の達成度が、第三折に遠く及ばないことは明らかだろう。兩折とも内容は同じ「道中」（往路は「歸郷」、復路は「歸京」である）を扱っているが、第二折が單に仙人のよきところを歌う道情曲のみで構成されているのに對して、第三折はまさに「呂純陽顯化滄浪夢」という題目の通り「滄浪夢を顯化」する場面となっている。これらの要素を總合して考えれば、同じ韻目を用いる兩折のなかでは、曲辭の文學性が秀で内容が題目と合致する第三折こそ

「竹葉舟」考

が「竹葉舟」原作の一部であり、第二折は後で挿入された部分とするのが自然であろう。

では、なぜ第二折は挿入されたのだろうか。その目的は何であろうか。次節では、この問題を考えてみたい。

三

原作に挿入されたと考えられる第二折には、呂洞賓をはじめ、列子や張良など計五人の仙人が登場する。道情を強調するだけであるならば、呂一人でも充分と思われるにもかかわらず、敢えてほかの仙人も登場させたのはなぜだろうか。

この問題を考えるにあたっては、第四折「正宮」の次の曲が重要な手掛かりとなる。

「外末云」師父、言這幾個是誰。「正末唱」

【堯民歌】這箇勝仙花曾遊大羅。這箇吹鐵笛韻美音和。這一箇口略綽手拏著箇箏籬。這箇髮蓬鬆鐵拐斜拖。這箇曾將那華陽女度脫。這箇綠羅衫笑舞狂歌。這箇落腮鬚常帶醉顏配。

（外末がいう）師父、この人達はどなたなのか、御紹介ください。（正末がうたう）

この方はかつて花を咲かせ大羅天に遊んだ。この方の鐵笛は妙なる調べ。こちらの一人は可憐な口元、手には熊手を離さぬ、髪の毛ぼさぼさのこの方は鐵杖を斜めにひきずる。こちらの方はかつて華陽の娘を度脱した。綠羅衫をまとうこちらの方は舞い踊り歌いわめく。髭がもじゃもじゃのこの方は常に酔いつぶれ眞っ赤に火照った顔をする。

悟りを開いて「出家」を決心した陳季卿が、仙人達に紹介される場面である。これは雑劇の「度脱物語」がもつ一種の「型」であり、それによって主人公の度脱は完了して芝居の幕は下るされるのである。では、ここで呂洞賓が陳季卿に紹介した仙人たちは、どのような人物を指しているのだろうか。一人ずつ見ていこう。

まず、『録鬼簿』が著録する無名氏の「唾觀音」という雑劇が手掛かりとなる。この雑劇の題目が「西王母歸元華陽女」、正名は「張果老度脱唾觀音」であることから、五句目の「華陽女を度脱」したのは張果老だと分かる。次いで、『元刊雜劇三十種』に「呂洞賓度鐵拐李岳」という雑劇があることから、四句目の「鐵拐斜拖」は鐵拐李岳と考えられる。また六句目の「綠羅衫笑舞狂歌」するのは藍采和であろう。これは宋末の畫題詩「藍采和踏踏歌圖」に「藍袍轉破轉奇特、別看仙人舞一回」という句があることと、度脱雜劇「藍采和」(古名家本)から知られる。では、残った四人はだれか。これを知るには、同じ度脱劇「任風子」の脈望館本に附された穿關本(穿關本とは、上演の際の役者の服装や小道具を具體的に記した臺本のこと)が記す小道具が手掛かりとなる。ここには、それぞれ「仙花」「鐵笛」「箎籬」と關連する「花籠」「袋笛」「金牌箎籬」という道具を持つ仙人の名が明記されているのである。「仙花」を手にするのは韓湘子、「鐵笛を吹く」のは張四郎、「箎籬を拏つ」のは曹國舅である。また、「鍾離」の所には「猛髻」と記されることから、本曲にいう「落腮髻」はおそらく鍾離權であろう。

以上を総合するに、陳季卿が紹介された仙人は、韓湘子、張四郎、曹國舅、鐵拐李、張果老、藍采和、鍾離權、呂洞賓の八人であること

が分かる。メンバーに出入りはあるものの、今日でもよく知られた「八仙」である。そして、この第四折における「八仙」の登場は、第二折が挿入された目的を考察するうえで、極めて重要な意味をもつ。

南宋・周密『武林舊事』卷三「迎新」には、以下のような記事が見える。

戸部點檢所十三酒庫、例以四月初開煮……以木牀鐵擊爲仙佛鬼神之類……雜劇百戲諸藝之外、又爲漁夫習閑、竹馬出獵、八仙故事。

戸部點檢所が管轄する十三か所の酒庫では、恆例として四月初めに煮酒の封を切る……「木牀鐵」をかかげて仙佛鬼神の類とする……雑劇・百戲など諸々の藝能のほか、「漁夫習閑」「竹馬出獵」「八仙故事」もとりおこなう。

南宋『寶慶四明志四明續志』卷十一「畫錦堂」「七子・八仙・三教」條に、これと全く同じ記録がみえ、さらに吳自牧『夢梁錄』卷二「諸庫迎煮(酒藏の酒出し)」條にも、これに似た記述がある。これらはいずれも民間に於ける「七夕」、及び官府酒庫が行う「酒の神様を祭る」活動の記録である。ここにある「八仙」が直接「竹葉舟」に見える八仙の話であるとはもちろんいえないが、古くから民間の祭祀活動には「仙人」がなんらかの形で關わる傳統があったことは確かであろう。

固定したグループとしての「八仙」が記録されるようになるのは、時代的にはかなり後のことである。例えば、明・胡應麟『少室山房筆叢』卷四十に「近聞元人慶壽詞、有鍾呂張韓等八人、信知起自元世也」

とあり、「八仙」の成立を確認できる最も早い資料は元代の「慶壽詞」であることを指摘する。胡應麟の言う「元人慶壽詞」がどんなものであったのか、具體的なことは分からないものの、「鍾（鍾離權・呂（呂洞賓）・張（張果老）・韓（韓湘子）」四人をはじめとする「八仙」が慶事の祝詞のなかに登場したことは極めて注目に値する。また、宋末の史浩『鄮峰眞隱漫錄』卷三十八が収録する、誕生日（恐らく自分の誕生日）に集い祝ってくれた親戚に對する挨拶の言葉であろう「諸親慶壽致語口號」という作品には、次のようにある。

雙旌容與留千騎 雙旌 容與として 千騎を留め
三族耆龐聚一朝 三族の耆龐 一朝に聚まる
正是瑤池八仙會 正に是れ 瑤池八仙の會
介眉何必羨松喬 介眉 何ぞ必ずしも松喬を羨まん

もう一首、元・胡祇遹の「八仙閣」という作品を見てみよう。

歡聲喜氣徹蓬萊 歡聲 喜氣 蓬萊に徹し
聞上君王萬壽盃 聞くならく 君王に萬壽の盃を上ると
今古仙凡哪有間 今古 仙と凡とは 哪ぞ間有らん
羽衣鶴鷺莫徘徊 羽衣 鶴鷺 徘徊する莫かれ

作品の内容からすれば、これは恐らく繪畫に描かれた「八仙閣」に降臨した仙人たちを詠じた畫題詩であろう。「歡聲喜氣蓬萊に徹し、聞くならく君王に萬壽の盃を上ると」という句は、宮中で祝賀行事が行われていることを示し、仙人たちがあたかもその祝賀行事のために

「竹葉舟」考

わざわざ「八仙閣」に現れたように書かれている。これら作品中の八仙も、『少室山房筆叢』が言及する「慶壽詞」と同様、めでたい存在として慶事に用いられていることは明白であろう。このことは、八仙人が登場する「竹葉舟」がこうした慶事と関連していた可能性を示唆する。つまり、「竹葉舟」は祝祭劇として慶祝の席において上演されたのではないだろうか。

祝祭劇といえ、明・朱權が自分の誕生日のために創作し、しかも實際上に上演されたと考えられる戯劇がある。題目は「呂洞賓花月神仙會」。八仙人が八人の儒士と化し、前世が桃花仙女であった娼妓張珍奴を三度度脱して、ともに王母の誕生日に赴く、という内容である。この劇では「祝壽」と「度脱」という二つの要素が融合されている點に注目したい。さらに、朱權の甥である朱有燉は「瑤池會八仙慶壽」（脈望館抄來源不明本）という作品の「引」の中で次のようにいう。

慶壽之詞、於酒席中、伶人多以神仙傳奇爲壽。然甚有不宜用者、如韓湘子度韓退之、呂洞賓岳陽樓、藍采和心猿意馬等體、其中未必言詞儘皆善也。

酒席における慶壽の詞では、藝人たちが多く神仙の傳奇を用い
てお祝いする。しかし、用いるべきではないものもある。たとえ
ば「韓湘子度韓退之」「呂洞賓岳陽樓」「藍采和心猿意馬」などは、
その言葉は必ずしもすべてが善いとは言えない。

彼のこの言葉からも、度脱劇が祝壽に使われる習慣があったことが知られる。

『元曲選』の中にも、「度脱」をもって祝壽を行う作品が見られる。

一つは明・谷子敬の「呂洞賓三度城南柳」、もう一つは『續録鬼簿』の作者とされる賈仲明の「鐵拐李度金童玉女」である。「城南柳」の最後、度脱された「柳の精」は「八洞神仙」すなわち八仙を含めた諸仙人とともに、西王母の誕生日祝いに赴く。しかしこの場合、度脱物語自体は第三折をもってほぼ完結し、第四折は全て仙界における金母（西王母）主宰の祝宴の場面で占められている。さらに、「金童玉女」には元雜劇ではあるはずのない「合唱」や「歌舞」の場面が盛り込まれている（これは南戯の特徴である）。舞臺で演じられる戯劇は、そもそも常に「歌」と「舞」とを伴うものではあるが、ここでいう「歌舞」とは芝居で演じられる物語とは直接関係しない、「祝壽」に適した獨立した内容のものを意味する¹²⁾。

このように、「八仙」を取り込んだ「神仙劇」「度脱劇」はしばしば祝壽の場において上演されていた。例として挙げた度脱劇は主に明代のものではあるが、やはり度脱劇であり、第二折や第四折に仙人たちが登場する「竹葉舟」も、同様に祝壽の場で上演されたテキストと考えるのは不自然ではあるまい。

とすれば、「竹葉舟」にも他と同様、「歌舞」らしき場面が必要であろう。「科白」が極力省略され、展開の分かりづらい点が多い元刊本テキストにおいて、明代のテキストと同様の科白を発見することは不可能である。しかし、よく見てみると、第四折の末尾近くに「擺八仙隊子上」というト書きと、最後に大文字で書かれた「散場」という文字を見出すことができる。

元刊本には「散場」をもつテキスト自体は少なくないが、その中でも、やはり「竹葉舟」は他とは異なった形式を取っている。すなわち歌の終わりに小さく「下」という文字が記された後、改めて改行して

大きく「散場」と書かれているのである¹³⁾。日下翠氏によれば、「散場」とは芝居が終わってから役者たちの總出によって行われる一種のフィナーレである。だとすれば、その直前にある「八仙隊子」とは、まさにそのフィナーレに登場するものではないだろうか。ちなみに、『元曲選』では「擺八仙隊子上」というト書きは見えなくなるが、その代わりに東華帝君が登場し、度脱された陳季卿と八仙に王母の蟠桃宴に赴くようにという天帝の敕を伝える内容が加えられている。これはまさにフィナーレと思われる部分の具體化であり、「竹葉舟」が祝祭劇として祝壽などの場で上演されていたことを示すものである。

四

ところで、第四折で八仙が登場するのは後半の第二宮調部分、すなわち正宮部分の末尾である。では、第四折前半【節節高】をはじめとする八曲は、劇情として何を展開したかという点、次に示す曲辭の通り、第二折と同様ひたすら「道情」が詠われている。

「正末打愚「漁」鼓上」昨日東周今日秦、咸陽燈火洛陽塵。百年一枕滄浪夢、笑殺崑崙頂上人。今朝無事、上街抄化。

【節節高】子爲這百年名利、做下一場公案。試把金馬玉堂、臣宰每從頭觀看。都待久居廊廟、長他功幹。做到三公位、享千鐘祿。呀、早上在百尺竿。怎知我早納下烏靴象簡。

（正末が漁鼓をうちながら登場する）昨日は東周の時代だったが、今日は秦の世。今咸陽に燈火がともり、かつての洛陽は塵のなか。

ただ一夜のはかない夢のような百年の移り変わり、崑崙山頂に住む仙人を笑わせる。今日はひまじや。街に布施を貰いに出掛けよう。このただ百年にすぎない名利のために、ひとたび世間を騒がした。金馬門や玉堂署で詔を待つ翰林學士院の宰相たちを見てみる。みんな長く朝廷の地位に留まって、自分の功績がいつでもも長続き。三公の地位まで昇りつめ、千鍾にもなる俸祿をいただくことを夢見る。ああ、なぜ氣付かないのだろう。早くも百尺の竿の上まで登りきったようなもの。どうして知ろうか、このわしが早く身を引いて仙人になった眞實を。

第一節でも觸れたように、【節節高】をはじめとするこの八曲は、一般に「仙呂宮」と思われている。しかし、曲譜によれば、實は「仙呂宮」だけでなく、「商調」でもこれらの曲牌を使うことができる。『元刊雜劇三十種』では「范張鷄黍」「魔合羅」「冤家債主」という三つの作品の第三折に商調が使われており、そのうち「冤家債主」の第三折には、「竹葉舟」第四折前半の八曲中七曲の曲牌が順番もそのままに使われている。また、第三折に商調【集賢賓】の一套を用いる【范張鷄黍】の息機子本は、套數の冒頭に【商調集賢賓】と表示しているにもかかわらず、【村裏逐鼓】以下の【元和令】【上馬嬌】【遊四門】【勝葫蘆】【後庭花】【柳葉兒】などの曲牌にわざわざ「仙呂」という語を足している。息機子本が「仙呂」の語を加えた眞意は必ずしも明らかではないが、いずれにしても「仙呂宮」と「商調」におけるこれらの曲牌の混亂が明代にはすでに生じていたことは見て取れよう。このことからすると、元來「商調」に屬した【節節高】にはじまる套數を、『元曲選』などの明本が「仙呂宮」と勘違いした可能性がある。

「竹葉舟」考

元刊本にある【節節高】等八曲を、かりに「商調」の套數として見る場合、そもそも套數はその宮調ならではの套式を踏まえなければならぬことを忘れてはなるまい。「商調」であるならば、【集賢賓」という曲を冒頭に置き、終わりに【尾】曲をもって結ばなければならぬ。例えば、『雍熙樂府』巻五が収録する「商調」の套數は、例外なく全てが冒頭に【集賢賓】、末尾に【尾】を置く套式を嚴密に守っている。とすれば、元刊本の【節節高】などの八曲がもし「商調」に屬するならば、【集賢賓】と【尾】とが削除されたもの、ということになる。これを前述したほかの元刊本作品に商調が第三折で使われる例があることと合わせて考えるならば、元刊本「竹葉舟」第四折前半の八曲は、もともと冒頭の【集賢賓】と【尾】曲が省略された「商調」套數の一部であり、原作では第三折だった可能性があるだろう。すでに論じたように、「度脱劇」はしばしば誕生日などに祝祭劇として上演された。「竹葉舟」もやはり祝祭劇として上演されたと考えられる。第四折後半の「正宮」の諸曲は、いかにも祝賀の席にふさわしい華やかな雰圍氣を醸し出す。例えば、【滾繡球】の一曲中に繰り広げられる雅やかな仙人の世界を見てみよう。

向蓬萊頂上過。訪故人藍采和。引著俺舊交游弟兄八個。看海山高銀闕嵯峨。共葛洪崖將星斗摩。同費長房把龍杖喝。喚仙童把洞門休鎖。對丹丘斟激灑金波。按雙成廣寒殿纖腰舞、聽麻姑女蓬萊洞皓齒歌。

賑やかな祝席を仙界に見立てているとも讀み取れよう。より一層慶事の間を盛り上げるにふさわしい内容である。この雰圍氣は、同じく

仙人が登場して道情を展開する第二折とも共通する。

だが、「竹葉舟」全體をみるに、その祝祭性が満遍なく作品に行き渡っているかと言うと、そうでもない。むしろ、祝席を想定するにはそぐわない部分も存在する。それは、原作では第三折だったと推測される元刊本第四折前半部分である。曲辭を見てみよう。

【節節高】子爲這百年名利、做下一場公案。試把金馬玉堂、臣宰每從頭觀看。都待久居廊廟、長他功幹。做到三公位、享千鍾祿。呀、早上在百尺竿。怎知我早納下烏靴象簡。【元和令】我庵靜坐。實。你爲功名從來乾。若是棘針途路接天關。更難行也人去攀。不管雲陽鮮血未曾乾。惡風波早過眼。【上馬嬌】饒你百事聰所事奸。那個會人馬平安。不如嚴子陵獨釣在秋江上。對紅蓼灘、閑把釣魚竿。【勝葫蘆】煞強如鐵甲將軍夜過關。他驅猛試跨雕鞍。有一日戰罷荒郊白骨寒。爭如我茅庵草舍蒲團。幃帳高臥得清閒。

筆者が傍點を施した「做到三公位、享千鍾祿。早上在百尺竿」(三公の地位まで昇りつめ。千鍾にもなる俸祿をいただく。早くも百尺の竿の上まで登りきったようなもの)などの言葉は、はたして祝席にふさわしい言葉であろうか。前節で言及した朱有燾も、「神仙傳奇」であつても「慶壽」には向かない劇目が存在することを述べていた。實際、彼が挙げた「呂洞賓岳陽樓」「韓湘子度韓退之」「藍采和心猿意馬」の劇目には、それぞれ「人を殺す」「左遷される」「事件で拘束される」という、縁起をかつぐめでたい祝席にはふさわしくない情節が設けられている。ここの曲辭に見える「高官厚祿」を「百尺の竿に登り切つた」とする比喻や、「雲陽鮮血未曾乾。惡風波早過眼」「戰罷荒郊白骨

寒」などの表現も、道情であるとは言え、祝席で歌うには憚られるものであろう。また、「竹葉舟」第三折の渡り船が轉覆して命が危うくなる、という情節も祝賀の宴席では喜ばれまい。

全體的に登場人物や内容を考えてみれば、第二折に登場する列子・張良などの仙人と第四折後半の部分で登場する八仙は、今まで見てきた祝祭劇と一致するものである。他方、「悟道」に傾斜した「竹葉舟」第四折前半の「道情曲」の措辭と、第二節で分析した「竹葉舟」第三折とは風格が一致する。つまり、「竹葉舟」の祝祭性は「第二折と第四折後半」に集中し、對する「第三折、第四折前半」は祝祭性が薄いが、士大夫特有の強い思辨性を持つのである。

以上を總合するに、現存する元刊本「竹葉舟」は、祝祭劇として上演する際に、原作に「第二折、第四折後半」を加えてできたものと考えられる。改編を行う際に、元來の第三折を第四折に移そうとしたのか、それとも一部を削除しようとしたのか、その邊りはよく解らない。しかし、第二折を加えることによって生じる不體裁を改めようとして編集ミスが生じ、元來の第三折が第四折の冒頭に中途半端な形で残ってしまったのが、現在の元刊本だったのであるまいか。

今日元雜劇と呼ばれる演劇は、原作がいつ誰によって生み出されたか必ずしも明らかではないが、恐らくは始めから上演を前提に臺本の形で書かれたものだったのであるまいか。だが、その臺本は上演される場所や環境に應じて適宜改作された。白話小説『金瓶梅詞話』第六三回「韓畫士傳眞遺愛、西門慶觀戲動深悲」が暗示するように、同じ芝居が喪儀の場で上演されることもあれば、廟祭や知識人サロンにおいて誕生日祝いに上演されることもあっただろう。實際の上演に應じて加筆・修正された臺本は、書肆にまわされ、坊刻のテキストとし

て上梓されることもあった。元刊本「竹葉舟」はこうした改編の筆跡を色濃く残すテキストであり、本劇の現存最古の臺本でありながら、すでに原作とは異なる部分を含むテキストだったのである。以上の觀點からするならば、今後、元刊三十種が収録するほかの元雜劇のテキストにおいても、「改編の痕跡」を注意深く探求していく必要があるだろう。

注

- (1) 三十種の作品は、今の研究段階においてはまだ一部の作品について論じられているのみである。例えば、太田辰夫『「拜月亭」雜劇考』(『神戸外大論叢』第三十二卷第一號 1991)、同『元刊本『看錢奴』考』(『東方學』第五十五輯 1978)、同『元刊本『老生兒』考』(『神戸外大論叢』第二十九卷一號 1978)、高橋文治『「任風子」をめぐって』(『興膳教授退官記念中國文學論集』汲古書院 2000)、同『元刊本『薛仁貴衣錦還鄉』をめぐって』(『東方學』第七十六輯 1988)、赤松紀彦『趙氏孤兒劇小論—元雜劇に於ける『悲劇』の一断面—』(『金澤大學教養部論集・人文科學編』第二十五卷一號 1987)など。
- (2) 『元刊雜劇三十種』序説(『未名』第三號 1983)、「いわゆる一人獨唱からみた元雜劇の特色」(『田中謙二博士頌壽記念中國古典戲曲論集』汲古書院 1991)。
- (3) 莊一拂『古典戲曲存目彙考』(上海古籍出版社 1982)、邵曾祺『元明北雜劇總目考略』(中州古籍出版社 1985)。
- (4) 趙景深『元人雜劇鈎沈』(上海古典文學出版社 1956)、隋樹森『雍熙樂府—曲文作者考』(新華書店北京發行所 1985)の四四頁に、「……で擧げた四曲を含む『歸隱』套數が「元・李壽卿『鼓盆歌莊子嘆鬻髻』

「竹葉舟」考

のものである」と記されている。

- (5) ただし、孫楷第『滄州集』(中華書局 1965)下「元曲新考・北曲劇末有楔子」は「東窗事犯」劇の末尾にある仙呂の部分に楔子としている。
- (6) 雙調を基調とする『紫雲亭』の第四折に見える大石調の曲辭は以下の通りである。
【鷓鴣天】玉軟香嬌意更眞。花攢柳襯足消魂。半生碌碌忘丹桂、千里駉駉覓彩雲。鸞鑿破、鳳釵分。世間多少斷腸人。風流公案風流傳、一度搬著一度新。
正宮を基調とする『東窗事犯』の第四折にある仙呂宮の曲辭は以下の通りである。
【後庭花】見一日十三次金牌。差大臣將宣命開。宣徽臣火速臨京闕、以此上無明夜離了寒柵。馳驛馬、踐塵埃、渡過長江一派。臣到朝中怎掙揣。想秦檜無孽划、送微臣大理寺問罪責。將反朝廷名字揣、屈英雄淚滿腮。臣爭戰了十數載、將功勞翻做罪責。
【柳葉兒】今日都撇在九霄雲外、不能夠位三公日轉千階。將秦檜三宗九族家族壞、每家冤仇大。將秦檜剖棺槨、剝屍骸、恁的呵恩和仇報的明白。
【鄭思肖】(24—318)「藍采和踏踏歌圖」詩「踏踏歌中天地開、紅顏春樹莫相催。藍袍轉破轉奇特、別看仙人舞一回」。
- (7) 『元曲選』はこの曲辭を改めて「倒騎驢疾如下坡(張果)。吹鐵笛韻美聲和(徐神翁)。貌娉婷策籬手把(何仙姑)。鬢蓬鬆鐵拐橫拖(鐵拐李)。藍關前將文公度脫(韓湘子)。綠羅衫拍板高歌(藍采和)。雙丫鬢帶啜醉顏酡(漢鍾離)」としているが、元刊本「鐵拐李岳」のテキストに見られる八仙メンバーは「竹葉舟」と同じである。元刊本「竹葉舟」は「八仙」が元代において既に固定していた根拠とも見なされている。この點に關しては吳光正『八仙故事系統論考—內丹道宗教神話的建構及其流變—』(中華書局 2006)を参照されたい。
- (8) 吳自牧『夢粱錄』卷二「諸庫迎煮」條には、次のような内容が見られ

る。「臨安府點檢所……每歲清明前開煮……至期侵晨、各庫排列整肅、前往州府教場、伺候點呈。首以……次以……後以所呈樣酒數擔、次八仙道人、諸行社隊」。

(10) ここに引用したのは詩の後半の四句、前半の四句は次の通り。「鬱葱佳氣擁叢霄、又見端門遣使韶。觴豆兼全眞璀璨、茗香剩馥更飄飄」。

(11) 胡祇通『紫山大全集』鐵琴銅劍樓影抄本は、この作品のタイトルを「八仙圖」とするが、ここでは文津閣本『紫山大全集』に従う。「八仙閣」は全二首。その第二首も挙げておく。「萬里斯須鶴背風、竝肩齊謁大明宮。仙家淡薄天多願、長在君王覆幬中」。

(12) 「金童玉女」劇の該當箇所を次に示す。

(金母) 金童玉女、您離瑤池多時。您則知您女直家會歌舞。可著俺八仙舞一會你看。(八仙上歌舞科) 眞仙聚會瑤池上、仙樂和鳴鸞鳳降。……玉殿金堦列衆仙。蟠桃高捧獻華筵。仙酒仙花映仙果、長生不老億千年。

この下りでは「合唱」が繰り広げられる。曲辭の大半を省略したが、誕生日祝いという慶事に相應しい内容であることは見て取れよう。

(13) 『元刊雜劇三十種』にある「散場」の表記形式および「散場」の意味については、日下翠「元刊本の『散場』について」(『田中謙二博士頌壽記念中國古典戲曲論集』汲古書院 1991)。

(14) 「百尺の竿」は『景德傳燈錄』卷十に見える「前池州南泉普願禪師法嗣」長沙景岑禪師の偈語として知られる。その偈語とは「百丈竿頭の不動の人、得入すと雖然も未だ眞爲らず。百丈竿頭須らく歩を進むべし、十方世界是れ全身」である。偈語の解釋は極めて難しいが、百丈或いは百尺の竿を登りつめ、全く身動きが取れない「不動の人」は、悟りを開いても「未だ眞たらず」すなわち「眞」の境地ではない。さらに「進歩」して「十方世界」に達してこそ最高の「全身」境地に達するという意味であろう。本曲は「三公」の地位、「千鍾」の俸祿を夢見る世間の人々は、まさに高い竿の盡きたところ、言い換えれば極めて危険なところに

いるという意味であろう。

(15) 馬致遠「呂洞賓岳陽樓」は呂が輪廻轉生して夫婦となった柳と梅の精を度脱するために、殺人を犯すシーンがみられる。「韓湘子度韓退之」は紀君祥の作として『錄鬼簿』などに著録されるが、作品そのものは逸失している。その内容は無名氏の「韓退之雪擁藍關」と同じと思われ、韓愈が潮州に左遷された事件を取りあげられたと考えられる。「藍采和心猿意馬」は無名氏の作で、殘曲があるものの全貌が分からないが、やはり無名氏の「漢鍾離度脱藍采和」と内容はほぼ同じと思われる。鍾離權が藍采和を度脱するために、彼を拘束して尋問にかける内容が見られる。詳しい内容は『元明北雜劇總目考略』を参照されたい。